

新しい価値創造のための哲学試論

栞 岡 大 輔

目次

はじめに

価値創造の前提としての、否定と破壊
価値創造の原理としての、力への意思と実存の世界
社会生活における「Well-Bing」について

はじめに

学生たちに「今、あなた方が最も関心のあることは何か」「今、あなた方がもっとも好きなものごとは何か」と問いかけると、どのような反応が返ってくるだろうか。答えはさまざまにある。はっきりとした答えを元気よく返す学生もいる。しかし、あいまいであったり、具体性を欠いていたり、現実に対して否定的なものも散見される。

それは学生ら自身が、自分の生や存在意味、存在可能性の具体的なヴィジョンを持ちえていない限りであろう。自分が生きていることそのものの中に、よろこびがあることを、忘れていたり、気づけずにいるか、そもそも失っている可能性さえある。

そうだとすれば、彼ら自身の生の存在可能性やその意義、そのための諸知識や技術、方法を教えるところの「学術」が、彼らにとって「わくわくするもの」「役立つもの」として目に映らないことは、むしろ必然である。

自身の生やその可能性、その喜びや現実的な関係性を、学ぶもの自身が自ら了解することがなければ、学術や社会というものはその本来の本質が享受されることなく、むしろ、一方的で、押し付けがましい、厄介なものにさえ成り下がってしまう。

逆に言えば、おのおのが自らの場所から哲学を始めるならば、単に頭で考えることと体で動くことは異なるといった区別を問題にするのではなく、どちらも同時に自らのこととして活かそうとするビジョンが成り立つだろう。

本論では、「新しい価値創造のための哲学試論」と題し、われわれが社会の中に生活しながら、いかにして新しい価値を創造しうるかを哲学的に考究する。

それはわれわれ自身が、社会やみずからの存在意味、価値、その可能性を考え直すための、ひとつの原理的観点を考える試みである。

価値創造の前提としての、否定と破壊

もっとも身近な生活意識—普段から私たちがそれになじんでいる、生活感覚、私たちの

自然的な意識において、私たちは今一度先の問いかけについて考えてみる事が出来る。すなわち、「今、わたしが最も関心のあることは何か」「今、わたしがもっとも好きなものごとは何か」と。その回答は個々別々のものであろう。それは何よりもまず、回答する人自身にとっての、生の「価値」を体現している、ひとつのものごとである。それゆえ、そこには回答者自身の価値観が生きている。その内実を紐解くならば、回答者自身の生の価値観がどのようにして成り立っているかを了解することが出来るだろう。

しかし、冒頭のように、問いかけに対してあいまいであったり、具体性を欠いていたり、現実に対して否定的であったりする場合には、ありのままに考えられた自身の価値はうまくつかめない。そこには抵抗がある。したがって、このような場合にはまずこの抵抗の意味をつかむことが肝要である。否定的であったり、あいまいであったりすることは、それがゆえに無意味なのではないし、そう考えることが悪いと決まっているのでもない。むしろ、生における不満や、社会の不備の意識こそ、生活や社会関係の改善を探そうとする新しい価値創造の視点が立ち上がる可能性を持つからである。

問いかけに対する出発点は、この場合には不満であったり、否定的な感情であったり、あるいは退屈さ、恨み、憤怒、空虚さ、絶望であることも十分にありうる。それらの質ゆえに、「よりよい生活・社会」を発想するには出発点として妥当でないと考えることは、一切不要である。

むしろ「あるものに対する不満・否定を認めない」ことは、逆に、原理的に新しい価値創造を生み出すことさえ出来なくさせるのである。「新しさ」はたえず現在の否定において発見されるのであり、「価値」は固定化されえない人間の自由な精神が見出す可能性にはかならないのだから。

創造は単に現在のありようを肯定するだけでも、否定するだけでも、生じることが出来ない。創造のためには常識や現状や現実の否定、すなわち破壊がなければならない。

創造のための破壊について、たとえばハイデガーは『存在と時間』のなかで、およそ次のように言っている。伝統的な存在論(価値解釈)はたえず伝統的な枠組みの中でしか世界を見ていない。それゆえに新しい世界や価値を自分の中に見出すことが出来ない。「人間」という概念ひとつをとってみても、それがヨーロッパの歴史上を支配する伝統的な意味でのみ受け取られている場合には、それがゆえに、人間の本質を見失ってしまう可能性さえ持っている、と。⁽¹⁾

常識は世界や存在の意味や価値を固定化させたり隠蔽してしまう可能性を持つ。だから、われわれは固定化された価値観や世界観、常識や世間的な視線を自らにおいて疑ったり、問いたずねたり、問い直したりすることが出来るのでなくてはならない。その方法こそが、哲学なのである。

創造のためには否定と破壊がなくなくてはならない。その際、否定とは、単に否定的にのみ

(1) 「現存在は、自ら存在しつつ存在というようなことを了解している、というありさまで存在するのである。そこで、この連関を堅持しながら、現存在が一般に存在というようなものを暗々裡にそこから了解しているものところは時間(Zeit)である、…(略)…このことを見届けるためには、存在了解の地平としての時間を、存在了解的な現存在の存在としての時間性から、根源的に解明する究明が必要になる。それと同時に、この課題全体のなかには、このようにして得られた時間の概念を通俗的な時間了解と対照してはじめをつけるという要件も含まれている。」(M.ハイデガー『存在と時間』(上)、細谷貞雄訳、筑摩書房、1994、p.59)

物事を見るということではなく、むしろ、現実に対する否定的な観点をはっきりとさせる重要な意義を持つ。それは、たとえば、ひとつの机やひとつのいす、自分自身や社会のサービス、それらに対する不満や否定感情を認めることが、はじめて、そのものの本質を生かそうとする可能性を描くための「観点」となることを意味するのである。

その意味で破壊とは、端的にものや人間や社会を破壊することを意味するのではなく、まさしく創造のための破壊として、世間的な評価や固定化された価値・常識を破壊することなのである。そのためには、よいもののよさを知ることだけではなく、よいといわれるものに対する否定的観点をも、積極的に認めることが出来なくてはならない。よいものをよいと認め、よくないものをよくないものとして認めることが、肝要なのである。

価値創造の原理としての、力への意思と実存の世界

ニーチェは著書『道徳の系譜』において、キリスト教的な価値解釈を独自の仕方でも批判した。それは端的に言うならば、キリスト教的な価値解釈は生の根本的な感情『よい』の反動形成だったということである。これをルサンチマンといい、その帰結がニヒリズムであることはよく知られている。

ここでは詳論は省くが、反動形成の価値解釈とは、『よい』ものを反転させ『悪い』ものとみなすことである。ニーチェによれば、根本的な〈よい〉の感情は強く、己に自信があり、勝つものであり、富めるよさであり、身体的なエロスの根本感情を肯定することだ。ニーチェは、ギリシャ的-キリスト教的、貴族的-僧侶的、デュオニュソスの-アポロンのといった仕方でも価値解釈を二項対立的に対照させつつ、人間の根本的な生の喜びを認めることなくして、なぜ、人がおのれの生を享受し、生きることを望み、喜びを感じるのかと問いかけているのである。⁽²⁾

ニーチェは次のように述べる。キリスト教的価値解釈は1000年を超える長きに渡って、ほぼ唯一絶対の価値解釈として支配的であったことに加え、それが原理的に生の根本感情を否定するために、ヨーロッパ近代人は自身の存在とその生を自ら否定せざるを得ないニヒリズムに陥ることが必然であると。それゆえ、伝統的な価値解釈を自ら破壊することが肝要であり、そのためには、あえてニヒリズムを徹底することが決定的であると述べた。そのことによって得られるものこそが〈力への意思〉であるという。

力への意志とは、ニーチェによれば、ニヒリズムを徹底することによって各々の中に見出される生の肯定の瞬間である。それはおのれ自身の生に、たったの一度でも生きていてよかったと肯定できるときはなかったのか、と問いかける中で、問うもの自身においてしか見出されえない生の肯定原理の一点を指すのである。その瞬間を見出すときには、その瞬間こそがそれまでの絶望と、その後の苦しみの意味を教えるものとなるのであり、同時

(2) デュオニュソスの-アポロンの、等の対照においてニーチェが目指したのは、価値の根本性を自己確認することであって、〈よい〉ことの良さを認めることにあった点が肝要である。とはいえ、キリスト教的価値解釈が〈反動形成〉であるという考えがそのまま妥当であるかは別問題である。ニーチェ自身、キリスト教的な価値の転換の必要性について、後にキリスト教的な価値形成も、その時代の人間自身がおのれの生をだめにしないために立ち上げられたのだと考えている。そうだからこそ、〈力への意思〉として、人間の生の根源的な価値解釈の可能性に向かって、価値自身を問い直す哲学が必要だと訴えているのである。

に、なお自身のうちで脈動し、自身の喜びや生の意味を照らす光となる瞬間であり続けることを、自らにおいて見出すことが可能なのである。

そこにあるのは己自身の意思であり、生への意欲であり、その意味である。そしてまた、その意味を「無意味なこと」として、生き続けたいのかと問いかけるのである。⁽³⁾

ニーチェの哲学には創造と破壊が表現されている。それが伝えるのは、生はあらかじめ決められた世界なのではなく、むしろ、カオスそのものなのであって、そうであるがゆえにこそ、自分自身の価値観を否定的にも肯定的にも問いながら、本当に求められる生の(社会の)価値を求めることが可能でなくてはならない、ということだ。

ニーチェにおいてニヒリズムと力への意志は、価値創造のための破壊と創造の原理を哲学的に提示する重要な意味を持っている。だがニーチェ自身がそういっているのではない。あくまで、ニーチェ哲学を現代社会に適用させ、私たちが生・社会の価値創造ということを考えるときには、上のように考えることが生産的だということである。ニーチェにおいては、何よりも己自身の根源的な価値解釈の可能性が「力への意思」として見出されることが語られているだけである。そこに共同的な価値解釈の可能性は表立って見受けることができない。ニーチェが残したその課題は、ハイデガーの存在論的現象学が受け止めて問い直しているように思われる。

ハイデガーはたとえば、人間(現存在)がおのれ自身において己の可能性を求めて生きようとする存在であることを、「実存」と呼び、その世界解釈の可能性の原理と考えた。現存在は己の実存において可能性を世界の解釈の中に見出そうとする。この構造を、世界内存在と表現した。人間の生の意志が、あるいは生の感受性、心が、世界や社会とどのように密接に相関しているかを描こうとしているのである。⁽⁴⁾

実存は人間(現存在)の本質であるということが肝要である。ハイデガーはこのことを【実存的-実存論的】Ezistenziell-Existenzial構造と述べている。この意味は、哲学的には決定的なことである。これを詳細に論ずることは、哲学に寄り過ぎになるが、一言だけ言うと世界の価値解釈はいつも現状に与えられている解釈を否定することによって新しい解釈が生み出されるということである。その世界性の刷新こそ、新たな価値解釈の探求なのだ。哲学的には、新たな価値解釈の可能性は、いつも、伝統や否定される現在を前提する。この意味で、単独的な自己価値や絶対的な他者価値は存在しようがないということも言い表されていると考えられるだろう。そして、このようなあらゆる価値解釈は、存在解釈であり、それは絶えず現存在(人間)が自然や動物や宇宙や社会のもろもろの物事との係わり合いを通じて生み出され、また捨てられてゆくことを意味する。だから、世界は現存在の欲望や心を通じて編みかえられるが、その根底にあるのは存在であるということハイデガーは表現していると思われるのである。

(3) 〈力への意思〉が何かは、それぞれが己自身において見出せるし、また、そうでなくてはならない点が肝要である。なぜなら、己自身にとっての生の根本的な価値の根拠は、誰かによって決定付けられるものではなく、己自身において発見しうるものであるがゆえに、人間(実存)の固有の存在価値とその尊厳とが認められるものとなるからである。

(4) 「現存在について世界=内=存在という基礎構造をあらわに示さなくてはならない(第二章)。これは現存在の解釈にとって「アプリアリ的な原理」となる構造であるが、たんに寄せ集めてきた性質ではなく、根源的にかつ恒常的に全体として備わっている構造である。」(M.ハイデガー『存在と時間』(上)、細谷貞雄訳、筑摩書房、1994、p.107)

ハイデガー哲学は価値創造にとって重要な哲学的視点をいくつも提示しているが、ここではこれ以上詳細を論ずることはできない。たとえば、物の存在価値、現存在の本質からして必要とする価値観の根拠等についてより詳細に吟味することは、社会の中に新たな価値を創造していく上で有益であろう。これは別の機会に吟味して追究してゆきたい。

社会生活における「Well-Being」について

ところで、視線を現代の私たちの暮らしに向けかえて、次のように問うてみよう。

なぜ、この社会には社会福祉制度があるのか。なぜ社会福祉制度とその法は現行の諸規定をもつのか。それらの制度は本当に「よい」ものと言えるか。どうすればより「よい」ものにできるのだろうか——こうした問いに、いま、あなたならどう答えるだろうか？

これらの問いに対して一貫した指標を示す概念を社会福祉の本質としての「Well-Being」であると考えることができるのではないだろうか。

「Well-Being」は一般的に「健やかな生」と訳される。しかし「健やかな生」とはどういうことだろうか。まずこれが曖昧である。さらに、より語義に即せば「よい存在」「よくあること」という意味である。ではこの「よい存在」「よくあること」とはどういうことか。そもそも存在によしあしなどあるのか。こうして哲学的な問題に極めて接近することになり、その意味も不明のままである。それも無理はない。「よい」というのは普通、人それぞれ異なる感受性に基づいた主観的な感覚にほかならないからである。人によって「何がよいか」の答えが違うのだから、当然、唯一の答えなど存在するわけがないのだ。⁽⁵⁾

それではなぜ、一つの答えなどあるわけがない、にもかかわらず、わたしたちはものもの良しあし、事の良しあし、社会福祉のあり方や社会の在り方、あるいは人間のあり方について、上のように問うのか。

このように問うなら次のような考え方もありうるだろう。

すなわち、いっそ問わなければいい、そんなふうに問う方がずっと愚かではないか。誰かを守ればそのしわ寄せが必ず他の誰かに来る。したがって原理的に全ての人間が同時に平等に良いことなどありえない。だから、あらゆる「よきこと」など偽善にすぎない。偽善など捨て去るべきなのだ——そう言うことも可能である。

だが、これもまた一つの「よきこと」を目指した意見にほかならない。この意見は〈すべての人間が、同時に平等によくあるのでないなら、社会や人間の行いなど無意味だ〉という価値観に基づいている。そうでない生の可能性、つまりその人にとっての「価値ある生」が別に思い描かれているのである。その意見の背後には、その意見の根拠として、その人自身の生命のすべてが脈打っている。その人の記憶が、経験が、感情が、関係が、心身が、魂が、ありありと脈打っている。その人の胸には生きることについての価値が、存在の可

(5) 「Well-Being」という用語は一般的に社会福祉概念と考えられるが、その定義は不明瞭であり、その本質や概念の定義を考究することは重要な課題であろう。例えばそれは「フィランソロピー」と密接に関連する概念であるといわれるが、端的にそれと同一視することは難しい。というのも、「Well-Being」はいわゆる「慈善」的なことに限定される概念とは考えにくいからである。むしろ、社会の諸構造における中心的指標という程度の射程をも持つと考えられるためである。この意味で、フィランソロピーの概念との関連性が解明されることも必要であろう。

能性が、存在しうることとその喜びうること、あるいはその悲しみが、それらの色合いがある。つまり、その人自身の内に「よきこと」が宿っている。だからこそ、その人は人間の行為に対してわざわざ「偽られし—善」と言いうるのである。したがって、この人の意見は、偽善を否定するところの善の主張にほかならないのである。

こうして私たちは人間である限り、上のような問い—よりよくいきうることはいかにして可能か—を止められない。よきことや価値自身、善を見限り捨て去ることができない。なぜなら、その問いの手前には、つねに既に、いのちの尊厳とその可能性とが曖昧にはあるが、おのおの自身の実存のうちに宿っているからである。哲学はそこから問い直し、その人自身の固有な生の価値観から、一般の価値の可能性を見出す筋道を探そうとする。

「Well-Being」とはまさしく、それぞれの人にとって固有の、生あることの存在の可能性にほかならない。

だがそれは、単に個々人の「思うまま」「なすがまま」に人間があるということの意味するのではない。自己中心的な「独善」は、普遍的な善(Wellness)に必ず対立するからである。それはただの「自己中心的な欲望」である。それは何かを否定することによってのみ自分であるようなものに過ぎない。その視線からは自分自身が自分でないものを通じてのみ自分でありうるが見出されはしない。自己中心的な欲望は自分を飲み込む。その時、自分は欲望の主ではなく、むしろ奴隷と化しているのである。

人類が20世紀までに経験した戦争と不安の構造は独善を根にもつ。自国利益のみを追究することは結果的に人々を戦争へ巻き込まざるを得ない構造を生み出した。だからこそ、人類は欲望を向け変えようとしているのである。欲望に対する自由意志を論じるのはそのような背景をもつ。独善的欲望に制限をかけて、普遍的に許容可能な相互の欲望を認めようとした。それぞれが固有の生を享受しうる可能性を、そのような生の欲望の可能性を、Wellnessを求めるようになったのである。

「Well-Being」は独善的な欲望に基づくものではありえない。普遍的善によってのみ現実的なのである。欲望そのものが悪なものではない。重要なことは、「相互の欲望をよく生かそうと」するために、独善的欲望を制限して得る自由の可能性なのだ。欲望そのものは残る。それは、個々がおのれの生を歓ぶ根本的な可能性の土壌を準備するのである。

自分自身を生かそうとする自己の欲望の自由があることによって初めて、ひるがえって、誰もが、自分と同じく、それぞれにとっての固有の生を享受し求める可能性を持つことが了解されうるのである。

個々が死を含んだ生を歩むことができるということ。自分にとっての喜びを見出しうるということ。好きなものや好きなこと、大事なものやかけがえのないものに出会いうるということ。そうだからこそ、死ぬ生そのものを引き受け、了解し、そこに価値(意味)を見出しうるということ。これらのことは、何にもましてまず「いのちがある」ということに基づいている。「いのち」にあって自らの死ぬ生に何らかの価値や意味を見出しうるからこそ「生命の尊厳」ということも言われうるのである。

だが、それはまた逆に次のことも私たちに明らかに教える。すなわち、「いのちがある」がゆえに、死と不安、苦しみや絶望に陥ることもまたあるということである。「いのちがある」ということは、このような寄る辺なさを生きねばならないということでもある。よくも悪くもある、そのような、両義的に表情をコロコロと変える曖昧なもの、あいまいさ

の中にあること、それがいのちを人間として生きることなのである。それはカオスの中に投げ入れられながら、形を捜し求めてゆくプロセスそのものである。目の前にあるひとつの缶ジュースが、それだけで、ドラマを持っている。そのために、恨みが生まれることもあり、それゆえに喜びが生まれもする。だから、われわれは、現代の生と社会のあり方に対し、創造的な破壊によって、新しい生の解釈と享受の可能性を開拓することができるのでなくてはならないのである。そのときの根本的な主体、その価値創造の原理は、ほかならぬ、今を生きている人自身の生の可能性の解釈に求められるよりほかはない。そしてこれを見通し、これを社会に結びつける方法を準備するのが、教養としての哲学だといえるのではなかろうか。

いのちあることのうちには顕在態と可能態がある、とアリストテレスは考えた。このいのちの可能性はどんな人間にも等しくある。それぞれのいのちあることを、喜び、その生のあり方を求める可能性を探し求めてよいということ。それが、人間が自由を望む存在であるという意味である。そうして、自分自身の存在にあって可能性そのものが息を吹き返さうること、生命が脈打ち、脈打つ血潮が自分自身を動かし、いのちを生きているということを引き受けうること。自分が自分を許さうること、誰かとの関係のなかで求めてよいこと、できることを探さうこと、試さうこと。いのちあることを喜びうることが、この生そのもののうちには開かれてなくてはならない。それを開くものが人間であり、社会というシステムなのであって、むしろ社会がそれを閉ざすものであってはならない。

「Well-Being」は、それぞれにとって固有なものであるという意味で唯一であるが、それがどのような在り様にも形づくられうるといって多様である。唯一でありながら多様であることが人間の無限性である。それは、すべての人にとってそうであるという意味で普遍的であり、それぞれの「Well-Being」が花開くその水路こそが、社会であり、サービスであり、語義に基づくならば社会福祉制度であり、その成果こそが現実の実りである。それ故、水路が悪ければそれをつくり直さなければならない。そうできなければならないことに、ヨーロッパの教養が気付いたのは実にここ数百年に至ってのこと、といえるかもしれない。

近代の市民社会は、自由意志を持つ人間同士が、自分の自由のために、互いのあいだにルールを作って相互に律し合うことで、それぞれをより自由にする関係を目指してきた。終わりなき戦争と競争を繰り返しながら、それでもなお、人びとは社会をつくり、ルールを作り、互いに関係をつくりながら生きてきた。そこには互いを喰い合う醜さもある。互いに対して厳しく接し、突き離す「他人」の顔もある。いまの社会は人間が作り出したものにほかならない。そこには矛盾がある。金を儲けることと貧困を生み出すことは、社会のあり方において在る。私たちは、そのどちらかだけを守るべきとは言えないのが現実である。経済活動がやめば救援支援できなくなる。救援支援を無くして経済活動だけを進めようとするれば人間がそれを許さない。そうして、私たちは、私たち自身を問うのである。

自分(私)というものがあること。それ自身の内には深い絶望や不信、迷いや恐れがある。だが同時に、その内には生ある限りのいのちの喜びがありうる。何がよいかはその人自身が見定めることによってよりほかには判断し決定する基準はない。それこそが、「よい」ことの固有さを示し、自分自身が生を生きる価値の唯一性にほかならないのだから。

私たちはそれを考えるとき不思議と、ぬくもりを思い出す。微笑みを思い出す。そこに

は共通した類似性があることに気がつく。忘れかけて、聴こうとしなくなった自分自身の声、感受性に、耳を傾けてみる。目を凝らしてみる。何が嬉しいのか、素敵なことは何か。私が笑っていた時、泣いていた時、そこには私の根本的な価値の芽、すなわち「Well-Being」が芽吹いている。それが何かはあなた自身にしかわからない。だからこそ私たちは互いに問い合う意味を持つのである。そしてそれは、問いうるのである。その脈動は、誰の血潮のうちにも流れている。そして誰でも、今ここで、確かめ直すことのできるものはずだ。そうできるその根拠は、いつでも自分自身の「ある（存在）」に基づいている。自分自身がいのちのつながりのなかにある。社会のつながりの中でお互いを動かしあっている。そこに生きているものこそが「Well-Being」という、いのちを繋ぐ人間の意志なのではないだろうか。それこそが、新たな価値創造を可能にする可能性の原理なのだと私は考えるのである。

(2015.1.22 受稿, 2015.3.2 受理)

〔抄 録〕

新しい価値を創造するためには、よいもののよさを認めると同時に、よいと思えぬ否定をも認めうるのだからなければならない。なぜなら、新しいものは絶えず今を否定することにおいて生み出され、また創造的なものは絶えず破壊を要するからである。破壊とは端的な破壊ではなく、固定化された常識や価値観、世界像を創造的に破壊することを意味するのである。

ニーチェはニヒリズムと力への意思という原理を提示し、ヨーロッパにおける絶望の必然性と可能性を論じた。その射程は個々人に宿る肯定的瞬間の処在を明らかにし、おのおのの生の根本感情と生への意志を確認することにある。この欲望が実存の世界に結びつくことによって否定的に見えた世界は創造的に否定されうる可能性を持つのである。

自分と社会のつながりが、おのれの意志によって了解され、再び新たな世界を描きうるなら、その中で人は自分自身と社会の本質を相互の自由の承認の中に見出し、存在そのものの「よきこと(善)」を再発見できるのではないだろうか。そこに生きているものこそ、人間が脈々と受け継いできた存在の意志であり、「Well-Being」なのではないか。私たちはそこにおいて新たな価値創造の可能性の土台を再発見しうるのであり、新たな生を推し進めることが可能になるのではないだろうか。